

新型コロナウイルスの危機を、記録物に対するより強力な支援の機会に変える（仮訳）

Turning the threat of COVID-19 into an opportunity for greater support to documentary heritage

UNESCO 共同声明

新型コロナウイルスの感染拡大は、多くの国で近代史におけるもっとも重大な緊急事態であると宣言されている。世界がこのような前例のない世界的な危機にいかに対応したかは、将来の歴史の一部になるだろう。

国立公文書館、図書館、博物館、そして教育機関や研究機関を含めた記録物を保護、管理する機関は、すでに感染症の広がりとその社会に与えた影響を将来の世代が理解するための一助となる決定、行動を記録している。

このような情勢を踏まえ、世界規模での緊急事態の中において、記録物は、政府、市民、国際社会が過去にどのように感染症に対応してきたかについての歴史的見地を与える、重要な資源である。

いくつかの国では、すでに感染症に関する公的な記録を、きわめて注意深く保存するよう指示が出されている。これは、昨今の状況の重大さを強調しているだけでなく、将来的にこのような危機を理解し、位置づけ、そして乗り越えるために必要な記録や、情報管理資源を提供する機関としての「記録物を保護、管理する機関」の重要性を強調するものである。

それと同時に、記録物の重要な一面を占める人間の芸術的で創造的な表現に関する記録は、世界的な規模で社会的つながりや地域コミュニティの復活を実現する資源でもある。

ユネスコは、「世界の記憶」事業を通じて、2015年に採択された「デジタル形式を含む記録物の保護及びアクセスに関する勧告」の枠組みの中で、すべての加盟国・地域に対して、新型コロナウイルスに関する公的記録を残すための支援が行えるよう準備している。

新型コロナウイルスへの対応や将来的な感染症への備えを検討するうえで、加盟国、記録物を保護、管理する機関、そして市民が果たすべき責任が四つある。これらの責任は、とりわけ、記録物が有する教育的、社会的、科学的、そして芸術的な価値に基づくものである。

一つ目に、記録物の保護、アクセス性の確保に関して、国内、国際的な協力を強化する必要がある。これは、各国、各地域におけるユネスコの「世界の記憶」プログラムの国内委員会ネットワークを通して実現することができる。

このような目標に向けて、ユネスコもまた、例えば国際図書館連盟（IFLA）、国際公文書館会議（ICA）、文化財保存修復研究国際センター（ICCRUM）、国際博物館会議（ICOM）、視聴覚アーカイブ協会調整協議会（CCAAA）などを含むパートナー機関同士における国際的な連帯に注力している。

第二に、加盟国は危機リスクの軽減と管理のために、記録物の保存とアクセス性確保のための投資を増やす必要がある。

ほとんどの記録物は、公的支援に頼らざるを得ない状況であり、「自宅待機（避難）」命令は、間違いなく甚大な影響をもたらしている。

したがって、今後、記録物を保護、管理する機関が効果的に機能し、引き続き現存するために、民間による支援に加えて国による支援が不可欠なのである。

このような緊急事態の最中において、記録物を保護、管理する機関が、無料のオンライン展示、デジタル化された文書の複写閲覧、ソーシャルメディアを活用した市民との効果的な交流等を行うための機能を継続していることは、賞賛に値する。

できる限りこの危機に際する記録を確かなものにするために、公文書やより広い市民社会からの素材、またオンラインとオフライン双方の素材を収集するための資源や権利も記録物を保護、管理する機関に与えられる必要がある。

三つ目に、今まで以上に、記録物を保護、管理する機関は、研究者、政策立案者、メディア関係者、科学者、そして一般の市民にとってより一層アクセスしやすい状態であることが重要である。

過去に指導者たちがどのように緊急事態に対応したのかを理解することは、今日の政策立案者の決定にも影響を与えるものである。

科学者もまた、過去の感染症の記録を利用することで、研究手法を改善させ、新たな感染症の流行に対する最適な行動の道筋を見極めることができる。

より一般的には、一次情報のソースは、新型コロナウイルスに関する今日の認識を大局的に理解するための感染症の社会経済的、政治的、文化的影響についても示唆を与えるものである。

それに加えて、記録物を保護、管理する機関や他のレポジトリは、文化、言語、そして創造的表現に係る記録等へのリモートアクセスを通して、コミュニティの人々に互いにつながりを持たせ、心理的な支えとなることができる。

さらに、視聴覚で公的なメディアアーカイブは、都市封鎖（ロックダウン）がどのように個人に影響を与えているのか、このような健康的、経済的な危機に対して政府がどのように対応しているのか、メディアがそれにどのように反応しているのか、そして新しい連帯の形がどのように生まれているかといった、新型コロナウイルスによる緊急事態を記録することに懸命に取り組んでいる。そしてこのようなメディアアーカイブは、多くの労働者や教育過程にある若者がリモートワーキングやリモート教育に頼らざるを得ない状況を受け、デジタル化推進の加速化に貢献している。

加えて、一次情報へのアクセスを維持、提供することは、歴史的な教訓に基づく公衆衛生の手法について、一般市民の関心や参画を高める可能性がある。

最後に、個人、政策立案者、科学者集団は、感染症の流行とその対応を含む、世界が経験してきた記憶を有する主体としての、記録物を保護、管理する機関の利用価値を認識する必要がある。

アーカイブ、図書館、博物館は常に信頼性と質の高い情報を提供する主体であった。新型コロナウイルスに関する誤情報が増加する中で、記録物を保護、管理する機関は事実に基づいた科学的な情報を集め、整理し、広めることや、相対的な視点を提供することができる。

究極的には、将来の世代にとっては、記録物を保護、管理する機関が新型コロナウイルスに関する一般的な対応の記録を保存していくことを通じて、記録物を保護、管理する機関そのものがこの感染症を形作るものになっていく。

このような責任の重要性は、2017年に「世界の記憶」事業の国際登録にも認定されているWHOの「天然痘根絶計画」に明記されている。

1966年、WHOは、千年にわたり人類を苦しめてきた天然痘を根絶するための国際的なプログラムを創設した。

そして1980年に、WHOの世界保健総会は天然痘の根絶を確認した。この「天然痘根絶計画」にまつわる記録は、この疫病を根絶するために成された決定、行動にまつわる記録文書であり、昨今の疫病流行を抑制するためにも指針となるものである。

したがって、新たな疫病の流行を防ぎ、将来的にこのような地球規模の課題による影響によりうまく対応していくために、新型コロナウイルスに関する完全な記録が存在していることが重要なのである。

署名

Moez Chakchouk, Assistant Director-General for Communication and Information, UNESCO.

Gerald Leitner, Secretary General, IFLA.

David Fricker, President, ICA. Peter Keller, Director-General, ICOM.

Webber Ndoro, Director-General, ICCROM.

Toby Seay, Chairperson, CCAAA.

Papa Momar Diop, Vice-Chairperson, ARCMOW (Memory of the World Regional Committee for Africa).

Kwibae Kim, Chairperson, MOWCAP (Memory of the World Regional Committee for Asia Pacific).

Sandra Moresco, President, MOWLAC (Memory of the World Regional Committee for Latin America and the Caribbean).